

## 3月8日(土)シンポジウムのご報告

富田共同浴場・ひかり湯を「ひとのつながり」の新たなまちづくりの一步として、『地域にとって「ひかり湯」はどのような場所であれば良いのか。』というテーマのもと、富田 一幸さんを招いてシンポジウムを行いました。



### 「これからの地域福祉と社会的企業」

**富田 一幸**

- ・(株) ナイス代表取締役
- ・大阪知的障害者雇用促進建物サービス事業協同組合 (エル・チャレンジ) 理事長
- ・NPO 釜ヶ崎支援機構理事
- ・NPO 福祉のまちづくり実践機構理事
- ・部落解放同盟大阪府連合会 西成支部支部長

#### ★右も左も「空洞化する福祉」に「西成」を見た★

生活保護の方の家賃補助の限度額 4 万 2 千円に、賃貸住宅の家賃相場が上下移動していて、劣悪な住宅環境のまま、若者は家賃が高くてもいいから新婚家庭を確保できる所を求めて出て行く。しかし、低所得者は西成の安いアパートを求めてやってくる。住宅も、建て替えればコストがかかり、家賃が高くなり、住む人がない、だから建て替えようとしないう。所得の高い人は町から出て行き、所得の低い人は「しばられている」

生活保護 600 億が町に流れているのに町が豊かにならない。600 億をめがけてマーケットが進出しているけれども、「高くて」「選べない」「安心できない」商品が売られてしまう。

#### ★日本の社会運動はいま「冬」英国はもう「春」だった★

「官」でもない「民」でもないもうひとつ「道」を探そうと「日本型CAN設立研究会」「社会的企業＝もうけない会社」「企業」という立場で「まちづくり」や「社会問題」ができるのではないかとそのモデルをやっている、イギリスとイタリアへ勉強に。英国版隣保館「ブルムリ・バイ・ボウセンター」昔は職員が 20 人も 30 人もいた所だったのが、衰退していき、とうとう 1 人になってしまった。それから 10 年、「CAN」のグループが住民と立ち上がり今は、年間事業費 6 億で 120 人の職員が働いている。「ブルムリ・バイ・センター」にいろんな団体がオフィスを置き、さまざまな支援をしている。「社会運動の多元化」が大切。ロンドンのテムズ川沿いの「コインストリート」では、小学校が閉鎖されそうになったことが、街づくりの発端のなり、「企業」ではない「行政」でもない「社会的企業」が土地を買いマンションを建て、階下に芸術家のショップを集め、屋上には素敵なレストランまで作った。

★ ボクはこれまで「マイ・ウェイ」これからは「アナザ・ウェイ」★  
「市場」も「法制度」も万能ではない。湯加減のようなどいう意味での「いい加減」がいい。

「働かなければならない」から、「働きたい」へ、完全就業が目標ではなく、フル(すべての人々が)就業が目標。「消費者の人権 (こんなあったらいいなあ)」と「働きたい人の人権(働いてみたいなあ)」を重ね合わせていくことによって、新しい道ができるのでは・・・。「マイ・ウェイ」これからは「アナザ・ウェイ」他に道はないのかと考えるのが大切ではと思うようになった。

★地獄を見たボク達が見つけた「特別扱い」vs「地域力」★

「特別扱い」に代わる「地域力」づくりに力をいれ、西成にデザイナーズマンション・仏蘭西料理店・食券食堂を作った。「地域力」を活かす・伸ばすのが次の道。西成支部が「共済」『銀行』『就労支援会社』大切なのは町に「尽くす」のをやめ、まちに「溶けていく」こと。社会運動は、人の為に「尽くす」ことと気負ってきましたが、この街に「溶けていく」ことで、土壌となる「いい加減」を企てる『社会的事業』として、街に「溶けて」行きたい。